



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択
：Clinical Imagination生成プロセスに関する心理臨床学的フィールド研究

AUTHOR(S):

浅田, 剛正; 皆藤, 章; 井上, 嘉孝

CITATION:

浅田, 剛正 ...[et al]. 2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：Clinical Imagination生成プロセスに関する心理臨床学的フィールド研究. 研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2008: 40-41

ISSUE DATE:

2008-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143078>

RIGHT:

Clinical Imagination 生成プロセスに関する心理臨床学的フィールド研究
A Study about Creative Process of “Clinical Imagination”
through a Fieldwork in Clinical Psychology

研究代表者 浅田 剛正 (D3)

教員 皆藤 章

研究分担者 井上 嘉孝 (D3)

〔研究目的〕

本コロキウムは、心理臨床家が奄美大島という土地に自ら訪れ、そこでの体験を研究対象としての遡上に乗せることで、心理臨床家に必要とされる Clinical Imagination をめぐっての検討を行なうものである。

〔研究経過〕

参加者は臨床心理士である浅田剛正（京都大学教育学研究科臨床心理実践学講座）、井上嘉孝（心理臨床学講座）、山本有恵（心理臨床学講座）、皆藤章（京都大学教育学研究科、准教授）に、外部から水野しづえ氏（沖縄近辺の文化、風土に関するフィールド実践研究者、フィールドガイド）を加えた5名であった。

まず、研究メンバー全員による事前のディスカッション（2007年11月13日、11月22日、12月13日）を通じて、本コロキウムの目的を共有すると共に、必要なフィールド研究の具体的方法についても検討した結果、1月3日～1月5日の期間、奄美大島において田中一村の足跡をたどりつつ、必要な資料収集や、土地の人へのインタビューを行うこととした。ディスカッションの中では、奄美という土地を「訪れる」ことについて、個々の体験にどのようなテーマを持つのか、Clinical imagination という概念、および心理臨床家に必要なセンス、訓練等について、沖縄文化圏における儀礼や宗教性（シャーマニズム）と現代の心理臨床との関連についてなどの様々な心理臨床学的課題が提起された。

奄美大島でのフィールドワークにおいては、第一日目（2008年1月3日）に空港から一路、NPO 法人奄美 FM「ディ！ウェイヴ」に向かった。局長である A さんに、奄美の土地と文化について、そして A さん自身の思いについて、2時間余りのインタヴュー

一を行なった。そこで偶然にも Aさんからユタを紹介されることになる。

奄美大島に生まれた Aさんは、幼い頃から当たり前のように身近にあった奄美の文化を、時にわずらわしいものとしても感じていた。しかし、奄美の多くの若者と同じように本土の都市部に移り住んだ後、再び奄美大島に帰郷すると、奄美の文化が、あまりにも奄美の土地の人以外の視点から規定されていることを実感する。奄美大島の人間として、自分の生まれ育っていくこの土地をどのように生きるか、ということを問い、その地平に立って奄美を創ってゆくために、「わずらわしさ」をも含み込んだ自らの生きる文化に誇りをもち、島の音楽を島の人々に伝える NPO 法人の FM 局「ディ！ウェイヴ」を運営するに至っている。ちなみに、Aさんにとって、人生の節目に頼ってきたユタ神様（Bさん）の助言は、「（自然の）理に適ったもの」だと言う。

また、第二日目（2008年1月4日）には、午前中に笠利町奄美パーク内の田中一村記念館で資料収集を行ない、その後田中一村の終焉の家に訪れた。その後、Aさんから紹介された“ユタ神様”Bさんに2時間のインタビューを行なった。

Bさんはユタの家系に生まれ、彼女で七代目だが、ユタではない世代もあった。「あなたは神を拝まなくてはならない（＝ユタになる必要がある）」と別のユタからずっと指摘されていたが、ユタの生活は厳しいため、それを避けて生きてきた。しかし Bさんは人間として生きていく中で、何度も辛い経験を重ねる。あらゆる手を尽くしても、どうしても救いが得られなかったことから、いよいよ「自分で神を拝むしかない」と自らユタになることを決意することになる。以来 30 数年、Bさんはユタを続けており、真夜中でも人が来ると相談に乗り、訃報が届くと家の祭壇を清めなくてはならない。肉類を食べれば体に変調をきたし、身体病を抱えた人に会えば自らも同じ苦しみを味わう。ユタ神としての儀礼全般は、全て独学で体得したものだという。天照大神や海の力を尊び、訪れたメンバーに対してユタ神としての助言を与えていくその言葉は、強い迫力と説得力に満ちたものであった。

【研究成果】

以上の行程の中で、我々は奄美という〈土地〉を体験した。田中一村の体験した「奄美大島を訪れる」という過程を、自らの **Clinical Imagination** に焦点付けつつ重ねることとで、以下の2点が明らかになったと思われる。

- ① 異なる〈土地〉に「訪れる」ことを巡る、自らの内なる異質性との出会い、もしくは焦点化のプロセス
- ② 自らが寄って立つ〈土地〉へ「回帰する」ことによる新たな創造性への展開

自らその〈土地〉を体験し、これらを目の当たりにすることによって、訪れた臨床家個々の内面で強く揺さぶられたものは、心理臨床における **Clinical Imagination** であったとも言える。すなわち、内面的にこの2つのプロセスを経ることが、心理臨床において培われるべき専門的訓練過程として重要であると思われる。